シンポジウム　第1日（8月31日）　13:00～14:30　3号館3階3305教室（遠隔会場3307教室）

社会心理学は世界的な課題の解決に責任を持てるのか

企画者：　岡　隆（日本大学・大会準備委員長）

吉澤　寛之（岐阜大学・大会運営委員）

日本社会心理学会大会準備委員会

日本社会心理学会大会運営委員会

司会者：　岡　隆（日本大学）

話題提供者：　笹原　和俊（東京工業大学・非会員）

熊谷　智博（法政大学）

佐藤　剛介（久留米大学）

指定討論者：　唐沢　かおり（東京大学）

唐沢　穣（名古屋大学）

坂田　桐子（広島大学）

概要

国連や SDGs で頻繁に取り上げられる課題のなかで，社会心理学による直接的間接的な貢献が見込まれるものには以下が挙げられる。

① デジタル技術のインパクト　② 紛争と暴力の問題　③ ダイバーシティとインクルージョン

デジタル技術に関しては，シンギュラリティやディープフェイクの問題など，紛争と暴力についてはイスラエルによるガザ地区侵攻やロシア・ウクライナ戦争，ダイバーシティとインクルージョンにはLGBT'q，多文化，障害者の受容などが喫緊の課題となっている。

これら世界的な課題の解決に向けた提言に，社会心理学はどれほどの成果を上げているのだろうか。社会変化はドラスティックで，学術的な知見が社会に還元されるのを待つ余裕がないように見える。論文を書いて，本になるのを待ち，誰かが読んで参考にしてくれるだろうではダメで，自分の研究が直接的間接的に課題の解決にどう貢献しているかを明確にすることが社会心理学者に求められている。

本シンポジウムでは，①において「フェイクニュース」を専門とする笹原氏，②において「暴力紛争研究」を専門とする熊谷氏，③において「社会的障壁の研究」を専門とする佐藤氏が，ご自身の研究が課題解決にどう貢献するかという視点で話題提供する。各話題提供に対応する専門性を持つ指定討論者には，話題提供の研究が本当に解決に役立つのかといった視点から，総論的ではないガチの議論をお願いし，最後にフロア全体で考察を深めたい。

WS01 ワークショップ　第2日（9月1日）　14:30～16:00　3号館3階3303教室

アンコンシャス・バイアス測定を組織研修に活かす

企画者：　潮村　公弘（フェリス女学院大学）

稲垣　勉（京都外国語大学）

司会者：　潮村　公弘（フェリス女学院大学）

話題提供者：　鈴木　富貴（株式会社チェンジウェーブグループ・非会員）

小林　敦子（株式会社 EFIC・非会員）

指定討論者：　尾崎　由佳（東洋大学）

概要

IAT (Implicit Association Test)等の心理科学技法を用いてアンコンシャス・バイアス（無意識の偏見）を，適切にかつ精緻に，すなわち妥当性・信頼性高く測定する努力が，社会心理学を中心とした人間科学・社会科学領域において，この20数年来，活発に進められてきた。同時に，この期間に心理学研究に向けられるニーズも拡がりをみせ，エビデンス・ベースト（evidence based）を重視しつつ，現実の組織・社会の問題解決にどのように役立つのかという視点も常に意識されるようになってきているだろう。本ワークショップでは，心理科学的な測定を基に，組織研修等においてアンコンシャス・バイアス概念をどのように活用できるか，議論を深めていきたい。

鈴木富貴氏（株式会社チェンジウェーブグループ）からは，アンコンシャス・バイアス測定ツールである「ANGLE」のご実績（これまでの受講者数は10万人超）を踏まえた上で，アンコンシャス・バイアスへの継続的取り組みをサポートする新しいツールである「ANGLE PLUS」のローンチに関連して，新しいツールへのニーズや，企業・組織の研修現場に導入するさいの工夫等について話題提供をいただく。

小林敦子氏（株式会社EFIC）は，アンコンシャス・バイアス測定を活用した企業向けジェンダー・ハラスメント防止研修の実践を進めておられる。この研修では，社会心理学における伝統的概念である認知的複雑性の醸成を通して，アンコンシャス・バイアスを低減させ，ハラスメント防止に導く実践・研究を進めておられ，その成果についてご報告いただく。

尾崎由佳氏（東洋大学）からは，ご自身の専門テーマである自制心に関連して，産学連携研究や企業・公的機関等の研修に取り組んでおられるご経験を踏まえて，指定討論をいただきたい。

さらには，フロアーからのご指摘やご質問を通して，私たち心理科学研究者として，今後のより良い関わり方について考えていく機会としたい。

WS02 ワークショップ　第2日（9月1日）　14:30～16:00　3号館3階3308教室

自然言語と社会心理学

企画者：　高野　了太（名古屋大学）

司会者：　高野　了太（名古屋大学）

話題提供者：　高野　了太（名古屋大学）

上島　淳史（慶應義塾大学）

松井　暉　（横浜国立大学・非会員）

橋本　萌那（東京工業大学・非会員）

概要

ChatGPT（GPT-4）をはじめとする大規模言語モデルの登場は，我々の生活や社会を変容させ，あらゆる分野の科学研究に衝撃をもたらした。この出来事は，（社会）心理学研究の方法論にも大きな影響を与え，質問紙項目の生成，自由記述を用いた心理傾向の測定，対話ボットの作成など，新しいアプローチやツールが次々に開発されている（e.g., Götz et al., 2023; Hitsuwari et al., 2024; Ke et al., 2024; Suri et al., 2024）。こうした展開から，自然言語を用いた研究に関心を持ちつつも，「実際にどうすれば良いのかわからない」「メリットがどこまであるのか見えていない」などの理由から，各々の研究に取り入れるのを躊躇している社会心理学者も少なくないと考えられる。そこで本ワークショップでは，社会心理学および計算社会科学の研究者が，自然言語を用いた研究を各自紹介し，研究を実施したモチベーションや，それを解決するためのアプローチを多様な形で提供することで，聴衆である社会心理学者が自然言語を研究に活かすきっかけを作る。

まず，高野（社会心理学）が，模擬陪審実験を用いた知識表象の共有に関する研究を発表する。続いて上島氏（社会心理学）が，意味空間上に存在するアイデアの探索に関する研究を発表する。次に松井氏（計算社会科学）が，書き手の立場に注目した日本語有害表現の起源についての研究を発表する。そして，橋本氏（計算社会科学）が，ソーシャルメディア上の議論に見る代替肉と道徳の関係性に関する研究を発表する。最後に，フロアからのご意見を頂戴する予定である。

社会心理学において自然言語を用いた研究にどのような利点・制約があるのか，今後どのような展開が期待されるのか，参加者の皆さんとともに議論し，考える契機になれば幸いである。